

二葉亭四迷訳『あひゞき』における西洋文物

— 服装及び髪型 —

初 内 裕 子

坪内逍遙は「長谷川君が二十四年前に始めて同じ書の譯『父と子』を試みた時分はそれは／＼苦心したもの。それも其苦、第一あの如き作を譯するに適當な日本語が極めて乏しかつた。制度文物から衣服器具から今では幾らも外國のと相通づるものが備はつてゐる」と述べている。現存する二葉亭の最初の翻訳『あひゞき』においても、西洋文物の代表といえる服装の訳出に二葉亭は苦勞している。ツルゲーネフが意図した「しゃれぶり」や「やぼったさ」を時代を隔てた日本人の私たちが正しく理解するのは困難を伴うが、ツルゲーネフ作品に現れる様々な人物描写と照らし合わせることでアクリーナやヴィクトルの服装にツルゲーネフが付与した意味を考え直し、二葉亭がそれをいかに理解し、当時の読者にどのように伝わったのかを検討したい。

まずアクリーナの服装と髪型である。原文と二葉亭訳を併記する。

...на одной из них [рук], до половины раскрытой, лежал густой пучек полевых цветов и при каждом ее дыханьи тихо скользил на клетчатую юбку. Чистая белая рубаша, застегнутая у горла и кистей, дожилась короткими, мягкими складками около ее стана; крупные желтые бусы в два ряда спускались с шеи на грудь. <...> Густые белокурые волосы, прекрасного пепельного цвета, расходились двумя, тщательно причесанными полукругами из-под узкой, алой повязки, надвинутой почти на самый лоб, белый как слононая кость; остальная часть ее лица едва загорела тем золотым загаром, который принимает одна тонкая кожа.²
 旁々の手を見れば、半はむき出しで、その上に載せた草花の束ねが呼吸をするたびに縞のペチコートの上をしづかにころがツてゐた。清らかな白の表衣をしとやかに着做して、咽喉元と手頸のあたりでボタンをかけ、大粒な黄ろい飾り玉を二列に分ツて襟から胸へ垂らしてゐた。<...> 象牙をも欺むく色白の額際で巾の狭い緋の抹額を締めてゐたが、その下から美しい鶯色で、加之も白く光る濃い頭髪を丁寧に梳したのがこぼれ出て、二ツの半圓を描いて、左右に別れてゐた。顔の他の部分は日に焼けてはゐたが、薄皮だけに却て見所が有つた。³

二葉亭訳を検証する上で、まず彼が参照する可能性があった辞書を確認する必要がある。二葉亭の身近に

あった文献として、東京外国語学校の蔵書にあるダーリの詳解辞書（以下「ダーリ」）とレイフの四カ国語辞典（以下「レイフ」）がある。⁴ さらに『露和字彙』⁵ およびアレクサンドロフの露英辞典（以下「アレクサンドロフ」）⁶ もあわせて調べてみたい。

まずアクリーナはチェック柄のスカートをはいている。клетчатый は露和字彙で「棋盤縞ノ」、клетка は「鳥籠。四角形ノ積重。棋盤縞」と説明されており、二葉亭は単に「縞」と訳しているが模様の形状は理解していたと考えられる。

юбка は露和字彙で「女袴」、アレクサンドロフで petticoat, skirt, レイフで a petticoat, skirt。ダーリの説明は часть женской одежды, от пояса и донизу; сшитые полотнища, на паворозе, вздержке вокруг пояса; понява, понева. Юбки вообще носят под платьем, для тепла или пышности, а в народе, где нет сарафанов, и сверху. である。即ち、「腰にまわすひもに布を縫いつけた形状の、腰から下までの女性用衣服」であり、防寒のため、あるいはふつくとさせるためにワンピースの下に着るが、サラファンのない民族は表に着用する。他にワンピースの腰から下の部分をさす用例、男性のフロック・コートのウェストから下の部分をさす用例、ジャンパースカートのように着用する肩紐つき袖無しブラウスをさす用例もあるが、今は触れない。また同義語として понева があげられているが、初めて《Свидание》が『同時代人』誌に掲載された時、原文は юбка でなく понева であった。アントシェンコワによると На юге на сорочку и верхницу надевали поневу (одежда типа юбки, несшитая по бокам); на севере — сарафан.⁷ という。北方でサラファンが用いられたのに対し南方ではパニョーヴァが用いられたという点、ダーリの説明と同じである。パニョーヴァはチェックか縞模様の手織布で作られる物であり、⁸ 従って中部ロシアに住むアクリーナがチェック柄のスカートをはいていたのは標準的な服装であったことがわかる。

辞書類から、юбка は女性が袴のように下半身につける衣服であることを二葉亭は理解できていたと推測されるが、問題となるのは「ペチコート」という訳語

である。現在ペティコートとは、スカートのラインを美しく出したりスカートと肌が直接触れることを避けるためにスカートの下に着用する下着をさすため、違和感をおぼえる。しかし前述のようにアレクサンドロフ、レイフ両辞書で「スカート」とともに「ペティコート」という訳語があげられ、ツルゲーネフ全集の翻訳家として名高いガーネット女史も checked petticoat⁹ と訳している。『日本大百科全書』¹⁰によれば「婦人服の下半身衣を独立させて、スカートとよぶようになったのは十九世紀以後のことであり、それ以前はローブの一部分とみなされ、ペティコートとよばれていた」。ウェブスター辞書にも petticoat = a skirt worn by women, girls, or young children as <a> an outer skirt usu. constituting part of a dress formerly worn by women and small children... とあり、アウタースカートとしてペティコートが用いられていたことがわかる。¹¹『女性下着の歴史』にはペティコートが「一貫して下着の規定を与えられるのは、1890 年以後」と説明されている。¹²つまりガーネット女史が翻訳した当時、ペティコートは表着だったのである。

同時代に юбка はどのように訳されていたのだろうか。明治 22 年の『あらしの花 美さほ草紙』¹³では юбка を含む一文が省略されている。明治 20 年代の他の翻訳での用例は現在のところ拾えない。ちなみに明治 42 年に出版された戸川秋骨・敲戸会同人訳『獵人日記』（ガーネット訳からの重訳）では「袴^{はかま}」と訳されている。さらに昭和 11 年の翻訳でも「袴^{はかま}」¹⁴で、「スカート」というカタカナ名称がなかなか定着しなかった様子がうかがわれる。もっとも訳者が男性であったことも考慮する必要があるだろう。

アクリーナは上半身には白い清潔なブラウス (Чистая белая рубаша) を咽と手首でボタンを掛けて (застегнутая у горла и кистей) 着ている。рубаша は露和字彙で「襦袢。襦衣」¹⁵、ダーリで сорочка, кошуля, тельница; одежда из числа белья, надеваемая под низ, на тело, アレクサンドロフで shirt, chemise, レイフで a shirt; 1. coat, varnish; 2. hair, colour。露和字彙では下着として説明しているが、二葉亭は表に着るものとして「表衣」としている。しかし二葉亭訳では ложилась короткими, мягкими складками около ее стана (胴のところで短くて柔らかなひだになっていた) が脱落し、「しとやかに着倣して」とあいまいに訳されている。これはブラウスの着方の問題で、ふわとしたブラウスをスカートのウェストで絞り込むことで、ブラウスにひだが出来た様を描写しているのだが、二葉亭には具体的な着用イメージが浮かばず、

訳出できなかったのではないだろうか。この個所は改訳でも脱落したままである。

さらに彼女は大粒な黄色いビーズの 2 連ネックレス (крупные желтые бусы в два ряда) を下げている。ビーズのネックレスとは農婦がよく身につけるもので、『ロシアのコスチューム』¹⁶にはビーズを連ねた数本の首飾りをつけた 19 世紀初頭の農婦が描かれている。二葉亭は「襟から胸へ垂らしてゐた」と訳しており、衣服の飾りとして想像していた可能性もある。бусы は露和字彙で「贗真珠^{ナンキンダマ}」¹⁷、ダーリで общее название дутых стеклянных, а иногда и граненых, пронизей, разного вида и цвету, アレクサンドロフで beads, false pearls, レイフで false pearls であり、「ガラス玉, 偽真珠」であることはわかるが首に巻く装飾品であることは説明されておらず、二葉亭がブラウスに付ける装飾玉と考えた可能性はここでも残される。

『あひゞき』発表当時、洋装はどの程度日本にはいっていたのだろうか。明治 16 年、鹿鳴館が開かれた。舞踏会や音楽会に出入りする者は全て男女同伴・洋装と定められ、西洋コスチュームが実際に着用されるようになった。しかし女性の場合、洋装とは即ち正装であった。明治 17 年、華族婦女子に洋装が導入された。これは明治 19 年に成文化されたが、「マント・ド・クール」(大礼服)、「ローブ・デコルテ」(中礼服)、「ローブ・ミデコルテ」(小礼服)、「ローブ・モンタント」(通常礼服)などの礼装に限られている。また華族以外では明治 18, 19 年頃から女子師範学校の制服に洋装が採用されるようになるが、腰の後ろを膨らませたバツスル・スタイルである。『浮雲』第一編でお勢が菊見に着ていく着物がきまらず「此様な時にア洋服が有ると好のだけれどもな…」と言う場面がある。ここでいう洋服も師範学校の制服のようなワンピース型のドレスであろう。この頃の女性の「洋服」とはいずれにせよ正装に近いもので、『Свидание』に描かれた「ブラウスにスカート」という農婦の姿にはほど遠いものであった。まして男性の二葉亭には直接眼にすることのないスタイルであっただろう。読者にとっても事情は同様だったと考えられる。

しかし翻訳者二葉亭のイメージと読者の理解との間で齟齬を生じた可能性があるのは「ペチコート」である。訳語としては問題ないことは先に検討したが、日本の洋装の歴史においては「ペチコート」は最初から下着として扱われていたのである。洋装の普及に一役買った『女學雑誌』においては「ペチコートの下衣を用ゆること」の必要性が説かれている。¹⁸従って、洋装に興味をもっていた一部女性読者は二葉亭訳の

「ペチコート」に違和感を抱いたかもしれない。

最後にアクリーナの髪型であるが、前髪が丁寧に梳かされ半円形に別れていた (расходились двумя, тщательно причесанными полукругами) ことしか言及されていないが、アクリーナは未婚であるから、当時の農婦の決まった髪型として長いお下げが後ろに1本垂らされていたであろう。そのお下げにはりボンなどが飾られていた可能性も高い。¹⁷ 前髪の上に細い緋色のヘアーバンドをしている。未婚の女性が使用する髪飾りであるから、頭頂部とお下げを見せる形である。повязка は露和字彙で「頭巾 (處女ノ)。帛紗 (編製シタル)。包纏」。ダーリで第二義に девичий головной убор: спереди походить на прямой кокошник, но не покрыть, и ленты (завязки) пущены по косе, Александровで head-band, fillet (of peasant girls), レイフで head-band, fillet (of peasant girls)とあり、二葉亭も「抹額」に到達したと思われる。髪の色は美しい灰色がかった金髪 (белокурые волосы, прекрасного пепельного цвета) である。белокурый はいわゆる「ブロンド」とは色合いが違う。近年最も評価の高い辞書の一つ《Большой толковый словарь русского языка》(БТС) では белокурый が светло-русый, さらに русский が светло-коричневый と説明されている。белокурый の男性の挿し絵¹⁸ を見ると、燃え立つような金髪ではなく、黄色をベースにわずかに茶色が混じったような色合いである。結果として белокурый は「茶色や灰色の混ざった、明るい亜麻色に近い金髪」であり、アクリーナの髪は特に灰色のニュアンスが強いと考えてよいだろう。белокурый は露和字彙で「灰白髪ノ」、ダーリで светлорусый, беловолосый, светловолосый, белявый, блондин; блондинка, белянка, беляночка, Александровで light-haired, fair, レイフで light-haired, fair, flaxen である。ダーリの説明にある語はいずれも「白」のニュアンスをもった金髪であるが、理解しにくい単語である。二葉亭は бело- という語根から「白」に関連する語であることを考えたであろうし、白髪では美しい少女の髪にふさわしいということで、「白く光る」としたのではないだろうか。この個所は改訳でも「白っぽい」と訳されているが、『めぐりあひ』における с белокурым коком は初訳で「亜麻色の前髪をたてた」、改訳の『奇遇』で「白っぽい光沢のある前髪を鶏冠^{とさか}のやうに立てた」と訳されている。『片恋』でもほぼ同様である。昭和に入ってから翻訳でも「白っぽい」という理解が見られる。¹⁹ белокурый という単語が「金髪」の概念と結びつくのは意外に遅かったようである。色は視覚に

よる認識と言葉による表現に個人差があることも手伝い、「定訳」を得るのに時間がかかった一例にもなる。さらに二葉亭が прекрасного пепельного цвета を「美しい鶉色」とした問題が残る。『二葉亭四迷集』注釈²⁰ では「鶉色」を「赤褐色」と解説し誤訳の原因には触れていないが、これは「灰 пепел」(形容詞 пепельный) と「ウズラ перепел」(形容詞 перепелиный) の単純な読み違いであろう。「ウズラ」はツルゲーネフ作品にはなじみの深い鳥であるが、読者は「白く光る鶉色 (赤褐色)」ではうまくイメージできなかったのではないだろうか。改訳では「美しい灰色」に直される。

では次にヴィクトルの服装を整理しよう。

Его одежда изобличала притязание на вкус и щегольскую небрежность: на нем было коротенькое пальто бронзового цвета, вероятно, с барского плеча, застегнутый до верха, розовый галстучек с лиловыми кончиками и бархатный, черный картуз с золотым галуном, надвинутый на самые брови. Круглые воротнички его белой рубашки немилосердно подпирали ему уши и резали щеки, а накрахмаленные рукавчики закрывали всю руку вплоть до красных и кривых пальцев, украшенных серебряными и золотыми кольцами с незабудками из бирюзы.
衣服を見れば故らに風流をめかしてゐるうちにも、また何處となく止度氣ないのを飾る氣味も有つて、主人の着故るしめく、茶の短い外套をはをり、はし／＼を連翹色に染めた、薔薇色の頸巻をまいて、金モールの抹額を付けた黒帽を眉深にかぶつてゐた。白襯衣の角のない襟は用捨もなく押し付けるやうに耳朵を撐へて、また両頬を擦り、糊で固めた腕飾りは全く手頸をかくして、赤い先の曲ツた指、Turquoise 寶石の一種 製の Myosotis 艸の名を飾りに付けた金銀の指環を幾個ともなくはめてゐた指にまで至つた。

主人のお古をいただくことはお屋敷勤めの従僕にはよくあった。ゴーゴリの『死せる魂』でも従僕のペトルーシカは主人のお古の茶色のフロックコートを着ている。ヴィクトルのコートは外来語の пальто (フランス語 paletot) であるから、軍人や官吏などが制服に用いた шинель (ケープ付きコート) や農民が着用した армяк (百姓外套、帯などでしめるタイプが多く、身頃がたっぷりしている) と違って、ヨーロッパ・モードの外套である。『獵人日記』の中から屋敷勤めの農奴の上着を拾うと、暗緑色のカフタン、青い厚ラシャの長いカフタン、青いフロック・コート、黄色っぽいチョッキ、水色の襟と紋章入りのボタンが付いている緑色の南京木綿のカフタンなどが登場する。『ロシアのコスチューム』によると屋敷付きの召使いたちの服装はだんなの着古したお下がりの服か、緑、青、

グレーの自家製または工場製品のラシャで仕立てた裾長のカフタンやフロック・コート、カムゾールまたはチョッキ、頸にネックチーフを巻き、長靴をはく²¹といったパターンで、『獵人日記』における召使いたちもそれに合致した服装となっている。同書によると、1830～40年代には田舎の村にも底つきの帽子〈カルトゥーズ〉が現れたが、そのような帽子を被るのは主として都会へ行き来する若者に限られていた²²という。ヴィクトルが被っているキャップはまさにこの〈カルトゥーズ〉であり、都会派を気取るヴィクトルにふさわしいかぶりものだったのだろう。さらに複数の指輪までつけ、畑仕事に従事する農奴と一線を画した服装であることがわかる。

「両端が藤色になっているピンクのネクタイ」についてはどうか。『獵人日記』では藤色のネクタイ、赤いネクタイ、黒いスカーフ、あせた藤色のネクタイ、まだら模様のネクタイなどが登場人物の身を飾っている。コートとの配色が当時のハイセンスなものであったか、やばなものであったかは判断できないが、「両端が藤色になっているピンクのネクタイ」そのものは、珍妙なものではなさそうである。

しかしヴィクトルの着こなしには重大な欠点がある。耳を押さえつけ頬に食い込むような奇妙に高いカラーにしろ、指先にかかるほどのカフスにしろ、サイズが合っていないのである。テキストでは触れられていないが、シャツもコート同様、旦那様のお下がりなのかもしれない。いくらかわいがられている下僕といえど、サイズに合わせてシャツをあつらえてはもらえないのであろう。従って、しゃれぶりをねらっているヴィクトルであるが、真の貴族である語り手から見れば身に付かないやばなセンスなのだ。Его одежда изобличала притязание на вкус и щегольскую небрежность というのは、さりげなさをきどっていても手の内が丸見えなのを強烈に揶揄する語り手の言葉である。しかもその長すぎる袖からのぞく指が赤くて曲がった農奴の指であることを語り手は見逃さない。

二葉亭訳でまず問題となるのは外套の色を「茶」としていることである。『二葉亭四迷集』注釈では「「外套は短い、青銅（からかね）のやうな色の」（改訳）が正しい」という説をとっている。露和字彙でも「青銅色」という訳があてられている。しかし日本語で「青銅色」という場合、寺の鐘の「茶色」から銅鐸のような「青みがかった銅の色」まで可能性が広がってしまう。明治21年当時の読者がどのような色をイメージしたかは今後の検討課題としたいが、「唐金^{からかね}」でなく「青銅^{からかね}」の漢字を使った場合は「青」

のニュアンスが強く受け止められはしなかっただろう。一方ロシア語では、ダーリとレイフでは具体的な色は指摘されていないが、アレクサンドロフには бронзовая краска = bronze colour, brown colour と「茶色」（ブラウン）が示されている。BTCでも золотисто-коричневый（金色がかった茶色）であるし бронзовый загар（ブロンズ色の日焼け）、бронзовые от южного солнца лица（南国の太陽でやけたブロンズ色の顔）、вечернее с бронзовым отливом небо（ブロンズの色合いをおびた夕焼け空）という例文からも「赤のニュアンスが強い茶色」が連想される。『獵人日記』の中では、「ブロンズ色」という言い方は他になく、別に「茶色のフロックコート в коричневом фраке」が登場する。「ブロンズ色」と表現している場合、やはり普通の茶色より金属的な響きをもつ。それは古びててかっていることを言外に示しているとも考えられる。ツルゲーネフの『二人の友人 Два приятеля』（1853）には次のような表現が出てくる。

Курпицын, <...> ходил в каком-то пальто-саке, с оттопыренным карманами, из сукна бронзового цвета. «Мне этот цвет за то нравится, — говаривал Петр Васильич, — что он не марок» (4, 322).

クルピツィンは〈…〉サック型外套のようなものを着ていたが、ポケットは出っ張っていて、ブロンズ色のラシャ地でできたものだった。「この色が気に入っているのは」ピョートル・ワシーリッチはよく言ったものだ。「汚れにくいからですよ」

ここでは汚れにくい色として「ブロンズ色」が使われている。いずれにしても、「青みがかった色」を連想させる「青銅色」より二葉亭訳の、それも初訳の「茶色」の方が、原文に近い色を読者に伝えられたと考えられる。

次に二葉亭は、アクリーナの服装で застегнутая у горла и кистей をきちんと訳し、処女作『浮雲』の冒頭ですでに「背広」を登場させているにもかかわらず、ヴィクトルのコートの着方で застегнутый до верху が脱落しており、改訳でも直されない。на нем было коротенькое пальто を「外套をはおり」としていることから、あるいは腕を通さず肩に羽織った状態と考え、「ボタンをかける」状態と矛盾し、処理できなかったのかも知れない。しかしこれはあくまで推測であり、疑問として残る。

ネクタイについては「はし／＼」を連翹色に染めた、薔薇色の頸巻」と訳されている。лиловый（藤色・薄紫色）が「連翹色＝黄色」になっている。лиловыйは露和字彙でも「連翹色ノ」となっている。アレクサン

ドロフ、レイフ共に lilac-coloured と説明されている。ライラックの輸入時期ははっきりしないのだが、ヨーロッパ原産のライラックが日本にはまだなかったとすれば、色を判断するのは困難である。ダーリでは светлофиолетовый, сиреневый; смесь цветов розового и голубого, голубоалый, алоголубый と説明されている。сирень (リラ, ライラック) は露和字彙で「連翹」となっており、やはり花名からすでに違っていることがわかる。しかし светлофиолетовый の фиолетовый が露和字彙で「堇菜ノ。青蓮色ノ」となっている。「青蓮」(せいれん=青い蓮) に「レンギヤウ」とルビがふられているが、これは「レンゲ」の間違いだろうか。漢字からしても「青い蓮華(れんげ)」を指しているようにも思われる。いずれにせよ、二葉亭がダーリの светлофиолетовый から「すみれ色」に到達するか、смесь цветов розового и голубого から「紫色」に到達していれば「連翹色」という訳にはならなかったかも知れない。『美さほ草紙』では в лиловом шелковом платье (6, 170) を「紫絹の衣装」と正しく訳していながら、за высоким кустом сирени (6, 219) を「連翹の木蔭より」としていることから、花名に混乱があったことは確かである。花名からアプローチした場合は色の訳に誤用が生じたことが推測される。

帽子については бархатный が脱落しているが、『めぐりあひゞき』では из-под черного бархата が「くろ／＼」とした天鵲絨の下から」と訳されているので、ミスによる脱落と考えて良からう。改訳では直されている。

残る問題は指輪である。二葉亭はトルコ石 бирюза を「Turquoise 寶石の一種」としている。露和字彙で「天然寶石ノ名」、ダーリで драгоценный, непрозрачный голубой камень, из средней Азии (Бадахшана), Алектандрофで turquoise or turkois, レイフで turquoise と記載されている。また незабудка (忘れな草) を「Myosotis 艸の名」としているが、露和字彙で「紫草科ノ草名」、ダーリで растение и цветок Myosotis, измодень, волосовая, горлянка, Алектандрофで forget-me-not, myosotis, scorpion-grass, scorpion's-tail, レイフで myosotis, mouse-ear である。現在通用している「忘れな草」は英語名 forget-me-not によるもの²³であるから、『あひゞき』翻訳当時はまだ輸入されていなかったのかもしれない。「トルコ石」も「忘れな草」も結局和名が判明しなかったのであろう、英語表記で残している。しかしながらペテルブルグ行きに心を奪われアクリーナを捨て去ろうとしているヴィクトルの指輪

が「忘れな草」であることがツルゲーネフによる仕掛けであることを考慮すると、花名があいまいなままでは語り手の冷たい視線が弱まっている。一方で二葉亭は украшенных серебряными и золотыми кольцами (金銀の指輪=それぞれ複数) を「金銀の指環を幾個ともなくはめてゐた」と訳し、はっきり個数の多さを示している。ヴィクトルのごてごてとした趣味は確実に伝わっている。

『二葉亭四迷集』注釈ではアクリーナの服装について「娘の白い額と白いブラウスは白樺の白い幹に、黄色いビーズの首飾り、緋色のヘアーバンド、スカートのチェックの模様は白樺の稚木の赤く黄色く色づいた葉に、対応している」、またヴィクトルについても「赤ら顔、団子鼻、濁った灰色の小さな目、黒い帽子、青銅色の外套、赤い指、指輪……このイメージは、薄紫色の幹、鼠とも緑ともつかない薄ぎたない円葉、長たらしい茎の白楊のイメージと重なる」と解釈している。²⁴ ドリーニンによると、少女の白い額と金色の日焼け、白い清潔なブラウス、黄色いビーズの首飾りが白くほっそりとした白樺の幹と金色の葉に、スカートのチェック柄は地上に落ちたまだらの木の葉に通じ、またヴィクトルが着用している端が薄紫色のネクタイは語り手の嫌っているやまならし (二葉亭訳「白楊」)²⁵の幹に通じる。²⁶

さらに付け加えるなら、アクリーナと白樺、ヴィクトルとやまならしが対応しているのみならず、アクリーナにおけるポジティブな色彩がヴィクトルにあってはネガティブに表現されている。アクリーナの額や清潔なブラウスの白はヴィクトルの滑稽な白い襟に、緋色のヘアーバンドは赤い指に、金色の日焼けは金銀の指輪に、美しい灰色をおびた金髪は乳色がかった灰色 (крошечные молочно-серые глазки) の小さな目に、それぞれデフォルメされている。先に筆者はヴィクトルのコートとネクタイの配色がセンスの良いものかどうかわからないと述べたが、ヴィクトルとやまならしを対比させるなら、この配色は汚らしいものとしてツルゲーネフに認識されていると考えて良いだろう。

二葉亭は逍遙の言うように見たこともない西洋文物と格闘しつつ、ツルゲーネフ独自の人物描写に取り組んでいる。そこには時代の限界もあり、二葉亭の誤訳もある。結果として、二葉亭も読者もアクリーナと白樺、ヴィクトルとやまならしという対比や、作者ツルゲーネフのアイロニーに強くは注目しなかったと思われる。周知のように、『あひゞき』前半と終結部の自

然描写が当時の文学者や読者に強い印象を残しながら、²⁷ あいびきの場面はまるで独立した別物であるかのように看過されたことの一回に、主人公達の外見を自然と一致させて描くというツルゲーネフ独自の筆致が認識されなかったことも関与しているのであろう。『あひゞき』を読み解く一つの手段として、登場人物の姿にせまっていって訳者の意識の道筋と、それを受け止めることで読者がイメージする可能性の範囲、その一致とずれを確認しておきたい。

(もみうち ゆうこ・長野大学)

*本稿は平成9-11年度科学研究費による共同研究「二葉亭四迷の初期翻訳における言語的可能性」(研究代表者:谷川恵一, 課題番号:09010114)の成果の一部である。

注

- ¹ 坪内逍遙「長谷川君の性格」, 坪内逍遙・内田魯庵編輯『二葉亭四迷』, 易風社, 明治42年, 上ノ225頁。ここで言及されている『父と子』の二葉亭訳は現存しない。
- ² 『あひゞき』との対照で原文を引用する場合は、二葉亭が用いた底本 Соч. И. С. Тургенева (1844-1864). Изд. Бр. Салаевых. Карсеруэ: Придворная типография В. Гаспера, 1865. С. 273-283 により、綴り字は新正書法に改める。その他の引用は Полн. собр. соч. и писем в 30-ти томах. Изд. 2-е. М.: Наука, 1978 を用い、() 内に巻数と頁数を示す。翻訳は初内による。
- ³ 二葉亭訳『あひゞき』の引用は『二葉亭四迷全集』1, 岩波書店, 1964, 158-69頁による。
- ⁴ Даль В. И. Толковый словарь живого великорусского языка: В 4-х т. М.: Риск, 1866; Рейф Ф. Новые параллельные словари языков русского, французского, немецкого и английского в четырех частях. Часть 1: Русский словарь. Объяснение русских слов на французском, на немецком и на английском языках. 4-е изд. СПб.: Фельтен, 1875.
- ⁵ 『露和字彙』は、文部省の委託を受けて外語の教師古川常一郎らが編纂、明治20年1月に出版された露和辞典である。二葉亭が外語を退学したのは明治19年であるが、教師らが辞典作成に関わっていた期間と二葉亭の在学期間が重なった可能性は十分ある。また辞典を編纂した教師の下で学んでいたことを考えれば、『露和字彙』と二葉亭の語学力にある程度の相関関係があると判断して差し支えないと思われる。
- ⁶ Полный русско-английский словарь, составленный А. Александровым. СПб.: Военная типография, 1897. 二葉亭の所有していたこの辞書(早稲田大学所蔵)は1897年刊行の第2版で、『あひゞき』翻訳時には使用できなかったはずだが、先行する1885年版を参照した可能性も否定しきれない。1885年版は筆者未見であるが、1897年版に収められた語彙を確認することも『あひゞき』理解に必要だろう。
- ⁷ Антошечкова Е. В. Русский женский костюм — костюм покоя // Русская речь. 1996. № 3.
- ⁸ Понева = Старинная русская поясная одежда замужней женщины: юбка из трех (реже четырех) полотнищ шерстяной или полушерстяной клетчатой или полосатой ткани (Большой толковый словарь русского языка. СПб.: Норинт, 1998. 下線は初内)。
- ⁹ Garnett, Constance. A Sportsman's Sketches // The Novels of Ivan Turgenev. 2nd ed. London: William Heinemann, 1906.
- ¹⁰ 『日本大百科全書』12, 小学館, 昭和61年。
- ¹¹ Webster's Third New International Dictionary. 1963. P. 1691.
- ¹² セシル・サンローラン『女性下着の歴史』深井晃子訳, Edition Wacoal, 1989.
- ¹³ 佐波武雄訳『あらしの花 美さほ草紙』(『その前夜』の全訳), 『やまと錦』第7-13号, 明治22年6-12月。佐波は二葉亭の同級生。юбкаを含む一文は次のように訳されている。Зоя сидела возле нее, аккуратно расправив юбку и сложив на коленях ручки; 「作雅は其側を離れず」
- ¹⁴ 米川正夫訳「その前夜」, 『ツルゲーネフ全集』3, 六藝社, 昭和11年, 81頁。
- ¹⁵ 『ロシアのコスチューム』I, 芹川嘉久子訳, 丸ノ内出版, 1974, 170-71頁。
- ¹⁶ 『女學雑誌』118 (明治21年7月14日)。太田路枝氏(神戸松蔭女子学院)のご教示による。
- ¹⁷ 『ロシアのコスチューム』I, 24頁。「娘の髪飾りは、三つ編みにしてなお頸すじのしたに垂れるお下げ髪に編みこんだりボンだが、前頭部には、金銀のモールまたは金色のネットで作った冠のようなかぶりものをつける。またお下げ髪につけるビーズの留め具もある」。また民謡にも「お下げにりボン」の娘がよく唄われる。
- ¹⁸ Андрианов Б. На великой Русской равнине. М.: Русский язык, 1981. С. 23.
- ¹⁹ 米川正夫訳『獵人日記』(六藝社, 昭和12年)では「白っぽい房々とした髪」, 中山省三郎訳『獵人日記』(角川書店, 昭和31年)では「濃くて光澤のある」と訳されている。
- ²⁰ 日本近代文学大系4:『二葉亭四迷集』, 角川書店, 昭和46年。
- ²¹ 『ロシアのコスチューム』II, 1974, 28-29頁。
- ²² 同書, 24頁。
- ²³ 『世界大百科事典』32, 平凡社, 1972, 583頁。
- ²⁴ 『二葉亭四迷集』補注185及び192:463頁。
- ²⁵ 『あひゞき』に登場するもう一つの西洋文物「樹名」「花名」については稿を改めて検討したい。
- ²⁶ Долинин А. С. Тургенев и Чехов // Творческий путь Тургенева. Пг.: Сеятель, 1923. С. 289-291.
- ²⁷ 『あひゞき』における自然描写が同時代人にどのように受容されたかについては初内裕子「島崎藤村とツルゲーネフ——藤村が聞いた音, 見た自然」(『比較文学』40, 1997)を参照されたい。

* Тургенев И. С. Записки охотника. (Литературные памятники.) М.: Наука, 1991. С. 175 に『あひまき』の挿し絵がある。アクリーナのブラウスが半袖になっている点が原文と異なるが、視覚的な理解に役立つ。



«Свидание».

Гравюра А. Малиновского по рисунку Н. П. Загорского. 1876. ИРЛИ

Юко МОМИУТИ

Проблема передачи реалий европейской культуры в переводе Фтабатэя Симэя рассказа И. С. Тургенева «Свидание» (названия костюмов и причесок)

Когда Фтабатэй Симэй в 1888 г. переводил на японский язык «Свидание» Тургенева, он постарался передать описания костюмов и причесок европейского стиля, с которыми японцы еще плохо были знакомы. Подробное изображение портретов героев и параллели с описанием природы — типичный тургеневский прием. Следовательно, нам важно понять, что имел в виду Тургенев, изображая наружность героев, как Фтабатэй понял это намерение писателя, и как он сумел передать свое видение этого элемента тургеневской поэтики своим читателям-современникам.

При переводе Фтабатэй мог пользоваться такими словарями, как «Толковый словарь живого великорусского языка» В. И. Даля (1866), «Новые параллельные словари языков русского, французского, немецкого и английского в четырех частях» Ф. Рейфа (1875) (которые были куплены университетом, где учился Фтабатэй), «Полный русско-английский словарь» А. Александрова (1855) (2-е издание которого осталось среди вещей Фтабатэя после его смерти) и первый изданный в Японии русско-японский словарь «Рова-Дзии», составленный учителями Фтабатэя.

Во-первых, названия некоторых вещей Фтабатэй мог перевести с помощью вышеуказанных словарей, но ему трудно было понять, как их носят. Например, Фтабатэй вряд ли хорошо представлял себе рубаху и юбку крестьянской девушки, так как в то время в Японии только представительницы аристократии одевались в европейские наряды для посещения светских вечеров. Поэтому Фтабатэй не мог вообразить, как «рубаха ложилась короткими, мягкими складками» около стана Акулины. Во-вторых, такие вещи, как «бирюза» и «незабудка» тогда в Японии были совсем неизвестны. В этом случае Фтабатэй оставлял в своем переводе английские названия, в результате чего от читателей ускользала тургеневская ирония, например в том месте, где описываются кольца с незабудками из бирюзы на руках у Виктора, покидающего Акулину. В-третьих, в ту эпоху, когда берет свое начало история перевода русской литературы на японский язык, в Японии считалось, что сирень и желтая форзиция — это один и тот же цветок, поэтому переводчик перевел «лиловый цвет» как «желтый». В-четвертых, Фтабатэй ошибочно перевел «пепельный цвет» волос Акулины как «перепелиный цвет».

初内裕子

В результате в переводе не совсем ясен смысл, который Тургенев вкладывал в сравнение Акулины и Виктора с березой и осинкой. В этом заключается одна из причин, по которым сцена свидания не произвела сильного впечатления на тогдашних читателей, несмотря на то, что сам рассказ «Свидание» оказал большое влияние на японскую литературу благодаря тонкому и лиричному изображению природы.